

伊勢湾台風に学ぶ



▲倒壊した海岸沿いの家屋（昭和34年・向山町）

なんだか、地球の様子がおかしい。
今年、長引いた梅雨と、たび重なる大雨は、
7月に九州や中国地方、8月には兵庫・岡山・徳島などに、
甚大で痛ましい被害をもたらしました。
幸い、この地域に大きな災害はおきていないものの、
風水害は、どこにでも起きる可能性があります。
改めて、過去に学び、台風シーズンに備えましょう。

▶防災対策課 ☎23局3548

伊勢湾台風のあらまし

『伊勢湾台風』とは、今から50年前、昭和34年（1959年）9月26日午後6時過ぎに、潮岬の西へ上陸した台風15号の通称です。台風災害としては、明治以降最多となる5098名の犠牲者（死者・行方不明者数）を出し、伊勢湾周辺の地域を中心に大災害を引き起こしました。

田原市においても、死者5名、重軽傷者75名、住宅全壊629棟、同半壊2238棟、床上浸水171棟という大きなつめ跡を残しています。

《伊勢湾台風のデータ》

上陸時中心気圧…929.5ヘクトパスカル
高潮…3.55メートル（名古屋港）
死者・行方不明者…5098名
住家全壊…4万838棟
半壊…11万3052棟

被害が拡大した要因は

伊勢湾台風の犠牲者は、それまで最多だった室戸台風（昭和9年）による3036名を大きく上回りました。犠牲者の範囲は、全国36道府県に及びましたが、その83%が愛知県と三重県に集中した点に特色があります。

では、ここまで被害が大きくなった要因は何だったのでしょうか。

❖高潮に弱い地形

伊勢湾とその湾奥部は、低く平らな平野が広がり、高潮が発生しやすい典型的な地形となっています。しかも、その先には干拓によって陸地にされた土地が広がっていました。戦後の復興・発展の過程で防災対策が不十分なまま市街化され、そこに観測史上最大の高潮が、暴風とともに来襲したため、被災期間を長期化させ大災害につながったのです。

❖災害への備えや自覚の欠如

しかし、最も大きな問題は住民の意識。高潮災害の危険地帯であることや、防災対策が不備であることの自覚と警戒心の欠如でした。台風災害により、毎年のように1000名を超える犠牲者が続いた戦後の混乱・受難期を脱し、社会が成長に向かおうとしていた時期であったことも、防災意識の低下につながった理由として否定できません。高潮の来襲が夜間であったことなども、被害が拡大した要因とされています。

ところが、このような状況にあっても、適切な避難によって犠牲者を出さなかった、または最小限に抑えることのできた市町村もあります。伊勢湾に面した三重県楠町（現四日市市）では、町内の大半の家屋が浸水しながらも、1人の犠牲者も出ませんでした。これは、行政や住民にとって貴重な教訓です。



▲倒壊した農家（昭和34年・越戸町）